

“地域型老人アパート”の周辺環境について

正会員 ○ 内藤 香*2

同 在塚礼子*1

老人福祉施設の地域化と複合化に関する研究(6)

1. 研究目的

本研究の対象であり、アパートとサービスセンターの複合施設である“地域型老人アパート”が、入居者の生活圏を拡大するとともに、住民の地域生活拠点としてよりよく機能するためには周辺環境が重要である。本報告では、入居者の外出行動と歩行ルートを選択の状況を通して、周辺環境のあり方を考察しようとするものである。

2. 研究方法

“地域型老人アパート”の最初の実例として位置づけられる世田谷区高齢者センター新樹苑をとりあげる。周辺環境について道路を中心とした現況把握をおこなった上で、入居者に対する訪問面接調査によって①外出行動特性 ②歩行ルートの選択(駅までの道/散歩道/好きな道など)を捉え、同時に実施した食堂利用調査で把握した地域住民の利用ルートも参照して考察する。

3. 結果(1)——外出行動特性

① 身体機能の低下による外出目的の限定、外出圏の縮小がみられる一方、極めて活発な外出行動ぶりも見られる。外出が限定されても通院は残ることから、外出頻度は全般的に高い。

② 目的、頻度、圏域を総合化し、外出パターンを a: 限定型、b: 不活発型、c: 活発・近隣型、d: 活発・広域型に類別する。このパターンは身体機能との関連が深く、a bに機能低下傾向が大きい。

③ 身体機能が低下したbグループでの限られた広域外出先としては、親類宅への訪問があげられる。

4. 結果(2)——外出パターンと複合施設利用

① 身体機能が低下下みで有病率の高い a bグループでも、施設での行事やサークル活動参加率は高く、一方、外の生活の活発な dグループでは施設内活動参加率がやや低い傾向が見られる。

② 男性の活動参加率は極めて低い。

[表1] 調査概要

調査期間	1992年9月25日、26日、28日
調査対象	世田谷区高齢者センター新樹苑入居者 40人 (男性4人、女性36人)
調査方法	訪問面接調査
調査結果	調査実施 34人(男性4人、女性30人) 不在又は体調不調により未調査 6人 ・年齢 86歳以上 4(人) 81歳~85歳 7 76歳~80歳 20 71歳~75歳 3 ・居住年数 5年以上 25(人) 3年~4年 3 1年~2年 4 1年以下 2

[表2] 主な外出目的と外出頻度 単位: 人 N=34人

主な外出目的	外出頻度	毎日	1日おき	週に1~2回	計
通院のみ	a	1(1)	0	1(1)	2(2)
日常生活に不可欠な外出のみ (通院、買い物、銀行・郵便局)	c	2(1)	1(1)	4(4)	7(6)
新樹苑周辺だが趣味のための外出を含む(散歩、銭湯等)		3(2)	2	0	5(2)
交流のための外出を含む (親戚や友達に会いに、会合、食事)	d	5(1)	0	5(3)	10(4)
交通機関を利用する趣味、仕事での外出を含む		3	4(1)	3(2)	10(3)
計		17(5)	7(2)	13(10)	34(17)

#1 外出行動パターン a: 限定型 c: 活発・近隣型
b: 不活発型 d: 活発・広域型
#2 () は主な外出目的に通院を含む人

[表3] 外出パターン別・活動参加状況 単位: 人 N=34人

参加状況 外出行動パターン	両方		行事のみ参加	サークル活動のみ参加	行事・サークル活動両方参加	計
	不参加	参加				
a: 限定型	▲	●●			●●●●	7
b: 不活発型	●●	○○			●●●○	8
c: 活発・近隣型	▲	△○	●		●○○	7
d: 活発・広域型	△○○	○○			●●○○○○○	12
計	7	8	1		18	34

{▲—男性 ○—女性
{白—主な外出目的に通院を含まない人
{黒—主な外出目的に通院を含む人

Notes on Surrounding Environment of Community Housing
for the Aged — A Study of Opening and Combining
Facilities for the Aged (6) —

5. 結果 (3) — 歩行ルート選択

① 好きな道として多くあげられたのは、安全で快適な道 (B : 道幅が広く、車が少なく、桜並木がある) とともに、よく利用している危険だが便利な道 (A : 駅まで最短だが車が多い) である。

② 駅に行く時に利用する道としてあげられたのも A と B であるが、34人中28人が A をあげた。買い物の荷物がある時、なおさら最短距離をとるとみられる。

③ しかし、散歩する道として A をあげる人はほとんどなく、B が最多となる。また、好きな道としてはあげられなかった公園とつながりある道や、郵便局、銭湯、買い物などの目的場所につながる道があげられ、それらの存在が散歩を促す傾向が見られる。

④ ただし、好きな道も、散歩道も、なしと答えた人が最多である。

⑤ 身体機能低下がルート選択を限定しており、外出パターン不活発型での選択の幅の狭さと A を選択する傾向、反対に、活発・広域型での選択の幅の広さと A を選択しない傾向が特徴的である。

⑥ 買い物、郵便局までの道にトイレとベンチ設置の希望が多い。

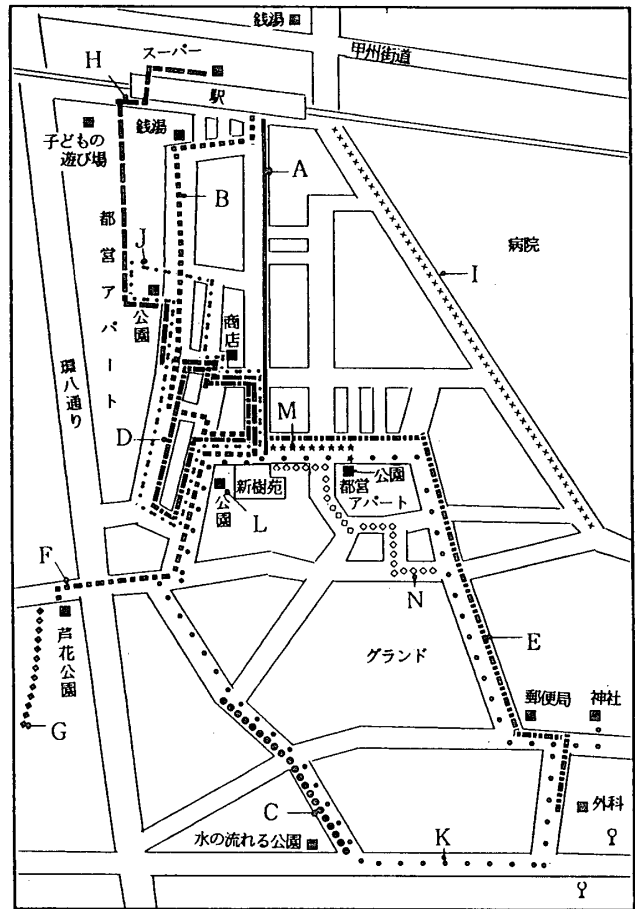
⑦ 地域からの食堂利用者については、徒歩よりも自転車利用者に、安全な道を選択する傾向が見られた。

7. 考察

“地域型老人アパート” が地域に開かれた施設として特性を発揮するためには、入居者の日常生活に欠かせない諸施設への主要ルートを把握して、それを重点的に整備するとともに、外出を促す魅力ある道のネットワークづくりが必要で、これは地域住民の施設利用にも効果的である。

〔表4〕 外出パターン別・ルート選択 (複数回答) 単位: 人 N=34人

外出行動パターン	ルート	ルート														計		
		なし	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M		N	
好きな道	a: 限定型	2	1	2			1			1								7
	b: 不活発型	3	4						1									8
	c: 活発・近隣型	2	2	1	1	1												7
	d: 活発・広域型	2	2	4	2		2	1		1								14
	計	9	7	8	3	3	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	36
散歩道	a: 限定型	4				1	1	1										7
	b: 不活発型	6	1					1										8
	c: 活発・近隣型	3				1	1	1					1	1				8
	d: 活発・広域型	2	5	1		1	1				1	1			1			13
	計	15	1	5	1	2	3	4	0	0	1	1	1	1	1	1	1	36



- A: 新樹苑から駅までまっすぐの道。駅まで最短距離だが道幅が狭く車通りが激しい。駅周辺には商店街がある。
- B: 駅へ通じる都宮アパート前の道。道幅が広く車通りが少ない桜並木が狭く道。公園に新鮮な野菜を売りに来るトラックが止まる。
- C: 夏には子どもで賑わう水の流れる公園へ通じる道
- D: 新樹苑から身近な買い物場所である商店をぐるっと一周。
- E: 道幅が狭く車通りの少ない郵便局、外科へ通じる道。道端に花を植えている家が多い。バス停に通じる道でもある。
- F: 車通りの激しい芦花公園までの道
- G: 緑が豊かで広大な敷地を持つ芦花公園内
- H: 子供の遊び場を抜け、桜並木のある都宮アパート前に抜ける道。
- I: しっかりした歩道のある道
- J: 新樹苑から都宮アパートの公園をぐるっと一周
- K: 新樹苑から水の流れる公園を通り、神社までぐるっと一周。
- L: 隣接の公園内
- M: 近所の公園まで。
- N: 木が多い都宮アパートを抜けグランドへ通じる道。

調査にご協力下さった新樹苑の職員の方々および入居者と利用者のみなさまに深く感謝いたします。

* 1 : 埼玉大学助教授 (工博) * 2 : 埼玉大学卒業生